



子どもの本から

おしおきまじりぞびくべんごすお

仲 明子

書店に並んだ数ある華やかな表紙の絵本の中から

私が手にとったのは、白地に素朴な絵の描かれたこの本だった。以前にどこかで出会ったことがあるような懐かしさを覚える絵本だった。それは、アニタ・ジェラームの描いた絵からくるものかと思いついてみたが、彼女の描いたものを私は今までに目にしていないようだった。では、この絵本の何に私はひ

かれたのだろうか。

この絵本は、＼ちいさなちやいろのノウサギは、おやすみのじかん。おおきなちやいろいノウサギのながいみみにつかまって、ベッドへいくところ＼という書き出しで始まる。ところが、その後の展開は、今まで私が出会った多くの、子どもを眠りに誘う絵本（眠らせ絵本）とは違っている。私はつぎの

二つはこの絵本の新しさを感じた。

まず、登場する二匹のノウサギの関係。この二匹は、幹が一抱え以上もありそうな大きな木やどこまでも続いていそうな明るい野原で暮らしている。一

◀『どんなに きみがすきだか あててごらん』

サム・マクブラットニイ文／アニタ・ジェラーム絵  
小川仁央訳 評論社 一九九五年



方は小さく、もう一方はその何倍も大きく描かれている。二匹はこれから眠りにつくのだが、その会話から、親子や兄弟などの家族ではないらしい。さらに、身体の高いものが小さいものを守るのでも、力のあるものがそのことで関係を有利にするのでもない、それぞれが、それぞれにできることを認め合う関係（身体の大小にかかわらず対等）に表されていることに気づく。

それは、そのほとんどの場面で二匹が相手を正面から見つめている構図で描かれていることにも現れているように思う。広がりをもって描かれた自然の大きさに対し、二匹のその目は、胡麻粒ほどの点にしか描かれていないが、私は、この見つめあう二匹にひかれてこの本を手にしたのかもしれない。

つぎに、眠ることを連想させるのが、他の絵本のように、月、星、ベッド、枕、タオル、ぬいぐるみなどの夜や眠りのための「もの」ではなく入眠に必要な「安心感」であること。

二匹は、前述の書き出しの後、明るい野原で、

“うでをのびしたり” “せいのびしたり” “さかだちしたり” “とびあがったり” “はねまわったり” “しれ、自分が相手を「どんなにすぎだか」表そうとそれぞれのできる限りをつくしている。私は、眠る前のこの動的な展開に、まずは戸惑ってしまった。

やがて、それが、“みちをずっといったかわ”や“おつきさまにとどくぐらい”と、それがどんなに遠いか二匹で見るといふ静的なものに移っていったとき、幼い者にとって「ねむい」気持ちと「すぎな」気持ちはいつも一緒にあるのかもしれないと思った。幼い者が眠りに入るとき、大好きな人にそばにいてほしい。この絵本は、互いに好き同士だといふ「安心できる関係」をくりかえしくりかえし描くことで幼い者を眠りに誘っているのだと気づく。

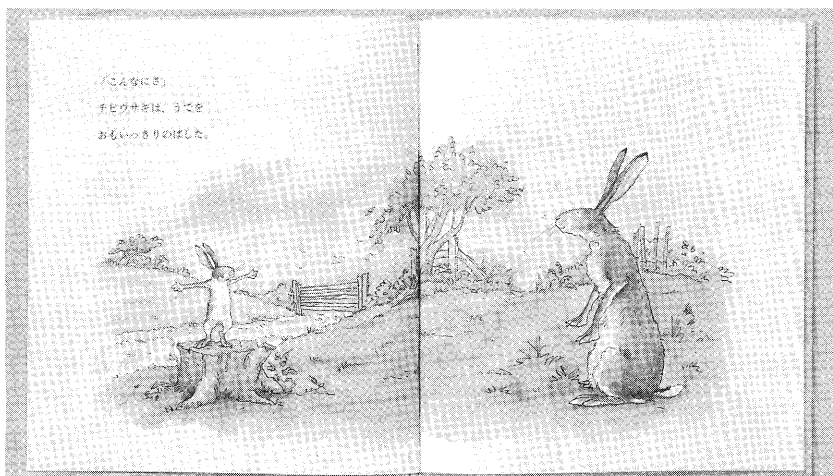
見るものを安心させる関係がこの絵本には描き出されている。そのことが、眠る前の子どもだけではなく、初めて見た私をも見覚えのあるような懐かし

い気持ちにさせたのであろうか。

この絵本は、眠る前の子どもとだけではなく、ことばを覚え始めた子どもたちと一緒に開いてみたい本でもある。

ここでテーマになっている、「相手に好きな気持ちを伝えること」は誰にとっても難しい。とりわけ、「誰にも負けないくらいいいっぱいすぎ」、とその「いいっぱい」を伝えることは。

では、実際、ことばを覚え始めた子どもにとつて、「いいっぱい」はどのように言い表されるのだろうか。一歳八か月のLに聞いてみる。朝目覚めてすぐ、まだ私の布団の中にいるLに、「おかあちゃんすぎ?」「シュキ」「どのくらい?」……しばらく沈黙の後、「フタチュ」。さらに、踏切に電車を見に行つての帰り道に、「電車、何台見たの?」「フタチュ」。どうやらこの時期のLにとって、「いいっぱい」は数も量も「フタチュ」の一言で表されるようだ。



▲「こんにちは」チビウサギは、うてをおもいきりのぼした。

一方、この絵本では、「誰にも負けないくらい  
いっぱいすぎだよ」は、「きみのこと、せいのみ  
せいいっぱいすぎだよ」と自らの身体で具体的に表  
されたり、おつきさまのように「（実際行けない）  
はるかに遠い」こととして小さいノウサギの口から  
語られたりしている。

二匹のノウサギの展開する、このような「いっば  
い」のいろいろな表し方との出会いは、子どもたち  
に豊かなイメージの世界をもたらすことであろう。  
このように、絵にも文にもあふれる魅力に、私は  
ひかれたのだと納得した。

（舞々同人）